

■ ジョウゼフ・コンラッド協会(英国) 第41回年次大会

2015年の年次大会は、久々にロンドンにはハーマスミスのP.O.S.K.とメイフェアのUniversity Women's Clubで7月2日から4日まで開催された。コンラッド協会運営に長年にわたって貢献してきたJohn Crompton氏の地元Lincolnで開催された2008年の大会と、パリのポーランド図書館とヴェルサイユのVersailles-St-Quentin大学で開催された2010年の英仏合同の年次大会でかつて発表したことがあるが、いずれの場合も風光明媚な歴史的名所というだけあって参加者はいつも以上に多く、特にヴェルサイユではそのためかセッションがあまりにもたくさん平行して行われたので思うように興味のある発表を聞くことができなかつたことを記憶している。それらと比べれば今回のロンドン大会はこじんまりとした大会だったが、またしてもパラレル・セッション形式に悩まされ、いくつかの興味深い発表を聞き逃した。中でも、私の発表と同じ時間帯に平行して隣室で行われていたEvelyn Chan氏、Joanna Skolik氏やAn Ning氏のお話を聞くことができなかつたのは残念だった。もつとも、そのような状況があつたために、むしろ休憩時間やディナーの際に発表を聞き逃した研究者の方々と直接お話しする必要性を感じ、親交を深められたのは結果的にはよかつたと言えるのかもしれない。その際に当然日本のコンラッド協会のことも話題になり、協会について少しは知ってもらうこともできたのではないかと思う。

ロンドンで開催された年次大会はずいぶん前に参加したことがあつたが、その頃と今回は学会の構成や雰囲気がそれほど大きく変わっておらず、懐かしい感じがした。確か少し前に英国のコンラッド協会の会長が交代したはずだが、主だった執行委員や幹部メンバーは長い間ほとんど変わっていないので当然と言えば当然かもしれない。当時も他の作家と比較する発表は一定数見られたが、今年も例えば、ツルゲーネフ(Brygida Pudelko, 'The Power to See, to Make Visible, and to Control in Conrad and Turgenev')、ウエルズ(Pei-Wen Clio Kao, 'The Unredeemed Exile of Time Travels: *The Time Machine* and *The Inheritors*')、フォークナー(Maurice Ebileeni, 'The Problem of Nonsense from Conrad to Faulkner')とコンラッドを抱き合わせて論じていた。この傾向は「闇の奥」に関して顕著で、“‘Heart of Darkness’ and its reach’

と銘打たれたセッションでは、ダンテの『新曲』地獄篇(Megha Agarwal, ‘Dissent and Descent: Transgression and Progression into the Underworld in Dante’s *Inferno* and “Heart of Darkness”’)のような古典から、サイドも高く評価したスーダンの作家 Tayeb Salih による現代アラブ現代小説で、マスター・ナラティブとしての「闇の奥」に対抗するカウンター・ナラティブ、『北へ遷りゆく時』(Samir Elbarbary, ‘Reading Cultural Crossover and Co-Existence in “Heart of Darkness” and *Season of Migration to the North*’)や、クルツをモデルにしたコンラッド大佐(!)が登場するゲーム『スペックオプス ザ・ライン』(Marcus Heinmaa, ‘Conrad on Consoles: *Spec Ops: The Line* and becoming Mr Kurtz’)までが取り上げられており、あらためて「闇の奥」の影響力の大きさが感じられた。

全体として、初期のマレーものから『ナーシサス号の黒人』、「闇の奥」や『ロード・ジム』などの中期の傑作はもちろん、『ノストロモ』や『勝利』を扱った発表が ‘Translations’、‘Polish Identities’、‘Gender’ ‘the Construction of Identity’、‘Genre, Language, Techniques’ といった共通テーマで括られバランス良く配置されてはいるものの、後期作品を取り上げたものは、『黄金の矢』についての筆者の発表と、同じセッションの『放浪者』を取りあげた発表にとどまり、全体の比率から言ってまだまだ後期作品についての発表が占める割合は低いと言わざるを得ない。依然として中期の傑作を好む伝統的パラダイムが支配的なのかと思いきや、一方で、ヴィクトリア朝末期のダイナマイト小説や(David Mulry, *The Revolutionary Pole in Late Victorian/Early Edwardian Dynamite Fiction*)、「食べ物」(Kim Salmons *Food as Cultural Narrative in Almayer’s Folly*)や「におい」(David Miller, ‘Conrad and Smell: Life, and the Limit of Literature’)というコンテキストや切り口での文化論的なアプローチはもはや定着した観があるし、デリダの名前もちらほら聞こえてくるようになった。デリダの歓待論で「エイミー・フォスター」(Douglas Kerr, *Seeing Yanko Goorall*)や自伝的作品を考察する発表(Francesca Mastracci, “Hostipitality” and Marginality in Conrad’s Autobiographical Writings)は、同じ問題でかつて「秘密の共有者」を論じたことのある筆者としては興味深かった。

University Women’s Club で開かれた学会最終日を飾ったのは、著名な蔵

書家でありコンラッド研究者でもあった Rick Gekoski 氏によるディナー後のトークである。2013年の7月にサザビーのオークションに出品された美術品収集家の故 Stanley J. Seeger 氏のコンラッドコレクションは、一人の作家のコレクションとしては過去最大規模であったが、2013年と翌年に行われたたった二日のオークションでその多くが売れてしまったらしい。Gekoski 氏はまだ出品されていなかった作品も含めてコレクションの残りを買取ったそうで、現在は氏の古書販売サイト (<http://www.gekoski.com/index.php/bookseller/latest-catalogue>)からそれらを購入することができる。

学会開催中早くも来年の開催地スコットランドの Edinburgh Napier University があちらこちらで話題になっていたところを見ると、来年は例によって今年以上の参加者が見込まれるだろう。早めに宿を押さえておかねばならない。

(やまもと かおる 滋賀県立大学准教授)